

神



www.columnland.net

一人の不幸な少女が、ぼつりとこう言った。
「かみさまなんてしんじゃえばよかったのに」

一つの願いが、世界を変えることもある。

その願いの大きさに関わらず。その願いの切実さに関わらず。
ただその願いの純粋さのみによって。

誰かが、誰かのために、それを叶えていた。

——だから。今日、今、この時。

かみさまは、しにました。

神の御加護もない。

主の祝福さえない。

この世の信仰のほとんどが、無意味で無価値に成り果てた。

とても理不尽で。

とても不条理で。

誰もが俯き。誰もがうなだれ。誰もが悲しみ。誰もが泣き。誰もが嘆き。

誰も笑わない世界になった。

誰も笑えない世界になった。

生きているのがつらくなるような。生きていくのがつらくなるような。

絶望と切望しかない世界。でもみんな笑おうとしていた。神様なんていなくても、不条理
不合理で不明瞭な人間関係に、人々は依存して支え合っていた。

そしてみんなで祈る。

神様がいれば、と。

でも、願いは叶わない。どこにも祈りは届かない。

けれど。それでもみんな、生きていた。

つらくて苦しくても。生きていこうとしていた……。

いますか

ちはやぶる

まだ神と人とが遠くなかった頃、都の近くには千早という負けん気の強い少女が暮らしていた。彼貴族の娘に生まれ、八歳まではなに不自由のない暮らしをしていた。しかし、彼女の父が時の権力者田との勢力争いに敗れたことで都から追放処分を受け、家族共々異郷に飛ばされた時から暮らしは一人。父はすぐに心労に倒れ、千早も働きに出ることになった。家財は一切売り払ったものの、日々のための財はそれでも足りなかった。しかし千早は持ち前の元気で何とか生き抜き、その日その少ない栄養で働き、一家を支えていた。両親は千早に感謝し、千早もこんな生活も悪くないと思い、やかな幸せすら感じるようになっていた。

しかしその幸せも長くは続かなかった。彼らも住む地に巨大な、恐ろしい龍が現れたのだ。龍は全てのをなぎ払い、焼き尽くし、潰して、壊した。千早の家も例外ではなかった。朝の仕事から帰宅うとしていた彼女の見た光景は、我が家が紅蓮の炎に包まれて、バチバチと音を立てて焼け落ちる光った。崩れそうになるその家からは、人の心の一番深いところに突き刺さるような叫び声が聞こえたを失う瞬間の最後の灯のようなもの。千早は最後に、両親の断末魔というものを聞いた。

山のように巨大な龍は咆哮を轟かせながら飛び立とうとしていた。すると、龍のうろこに何か硬いものが当たった。千早の投げた人の顔ほどある岩である。千早の顔は怒りを超越した、静かで、しかしなぎった、そんな表情をしていた。右手には「龍殺し」という彼女の家にある刀（とはいえ祭り用の道具）が握られていた。戦う気である。彼女は表情を変えずに声を放った。

「父と母の死の代償は、お前の血で払ってもらう。」（今に伝わる千早が口にした唯一の言葉である。しかし、その戦いは呆気なく決着が着いた。いや、龍と生身の少女では戦いにすらならなかった。爪を一閃させただけで、鮮血が鮮やかに噴出する音が聞かれた。彼女はすぐに絶命したのだ。龍はこの地から離れ、新たな獲物を探し求めた。

その百年後、龍がとある村を襲った話は既に伝説のものとなり、都の権力者、龍田雷光はその伝説味を持ち千早の遺剣「龍殺し」を収集し、軍の指揮に用いた。雷光自身は知勇兼備、人望も厚い宰相だったものの、千早の幸せを奪った龍田家に剣が巡って着たことに端を発した呪いなのか、いや全てはなのか、伝説の龍は再び舞い降りた。

都は瞬く間に火に包まれ、逃げまどう人々の嘆きの怨嗟がそこらに響き渡った。雷光は自ら軍勢を率いて龍と戦っていたが、劣勢は明らか、犠牲が増えるばかりであった。人間の敗北は間近であった。

奇跡は起こった。雷光の手にある「龍殺し」から一つの輝く閃光が発した。閃光は龍の心臓を貫き、雨を降らせた。龍の倒れた都の川の本流は何年も光り輝く赤に染まった。

誰が見ても明らかであった。その閃光の正体は千早の魂である。神に祭られた剣、そして龍と彼女の相反が起こした、まさに奇跡なのである。都に蔓延していた恐怖はついに活気へと戻った。

雷光は、都の万民が見つめる中、千早の家に謝罪し、名誉を回復、彼女らの祭壇も作られ、「龍殺し」飾られた。その場所は龍の死骸が横たわっていた、あの川の辺である。（後に龍田川と呼ばれる川で、後に川の色はついに落ち着きを取り戻した。千早の魂の力である。今では赤く染まるは紅葉のみである。ここにおいて、哀れる少女の魂はついに天に昇り、安らかな眠りに着き、一つの伝説が生まれた。

ヴァン。パイアとウィッチの聖夜

12月25日0時…

クリスマス…今年もやってきたわね。イエスの誕生日を祝うなんて不快。不快だから、クリスマスを中止にしようとしてたわ。数年前までは…

「セレン。」

「あら、イビル、何の用かしら？」

「メリークリスマス♪」

「あら、喧嘩を売ってるの？」

「ち、違うよ…。もしかして、忘れた…？」

「冗談よ。今日は記念日でしょ。忘れるわけがないわ。」

数年前のクリスマス、私は偶然このヴァンパイア、イビルと出会ったわ。イビルも私と同じようにクリスマスを中止にしようとしていたけど、この日の現実を知ってしまったイビルは最早そうする気はないわ。

もちろん、それを聞いた私も…。

その代わり…。

「ねえ。セレン。」

「何かしら？」

「今から、二人で。」

「ええ、いいわよ。」

この記念日にイビルと共に過ごすことに決めたわ。

長月の終わり

皆さん、こんにちは。私はとある神社の娘です。神社で幼い頃から暮らしていると、皆さんの知らない神様の姿を垣間見ることができます。知っていますか？神様だって電話するんですよ。

『ねえねえ、明日から神無月だけど、どうする？いつも通り新幹線で出雲へ赴く？…………。確かに出雲に行って一ヶ月も他の奴らとどんちゃん騒ぎすんのも飽きてきたわよねー。…………。そうそう、めっちゃ神密度高くて嫌になるわよねえ。何が八百万の神よ。てゆーか本当に八百万もいるのかしらー。…………。そうよね！私たち二人がいなくたって別に問題ないわよね。せっかく年に一度の神の休養月なんだからたまには違うところに旅行しましょー…………。確かに。神様が神社巡りとかアリよね！しかも、その神様はいないから気兼ねなく観光できるわね。…………。そうそう、そして神社にシロアリを大量に放つのもいいかもしれないわね。話は変わるけど、最近の参拝客ってろくでもない願いが言ってなくない？まあ相も変わらずトップは彼氏&彼女が欲しいだけだよ。…………。そう！！何が〇〇のアニメ化キボンヌだよ！！神様ナメてんのか！！最近のマンガとかアニメはとりあえず可愛い女の子を出しとけばいいって傾向にあるだろう？確かに、そういうキャラは可愛いけどさあ、やっぱり2次元じゃない？うちには可愛い娘が一人いるから萌えはもう足りてんだよって話。だからアニメ化するなら、そんなキャラで魅せるよりも、ストーリーで勝負するべきよ。もっと胸がキュンキュンするような少女マンガとかが、私はアニメ化して欲しいなあー。いや、せっかくなら実写化もアリね。…………。アンタもだいぶ変態よねー。まあそこがアンタのいいところでもあるんだけど。せいぜい逮捕されないようにね。…………。そうね、話がだいぶ逸れてしまったけど、神社に行く前にまず、私たちのサンクチュアリーに向かうことにしましょう。んじゃ詳細はまたあとで。』

(ガチャ)

「というわけで、明日は例のあの場所へ行くわよ。」

「えっ、私、明日学校なんですけど…………。」

「同人誌ぐらい買ってあげるわよ。」

「…………。」一緒にさせていただきます。」

「起承転結的証明法」※

起

神の反対は悪魔である。

承

神を英語に訳すと God となる。

転

God を逆から読むと Dog となる。

結

悪魔とは犬のことである。

※犬嫌いの正当化法

オールマイティな原理

背理法をご存知でしょうか。ある命題が成立したと仮定したときに、それをもとに矛盾が導き出されれば、その命題が成立しないという数学の基本的な原理の一つです。

さて、ここに集ってくださった、皆さんのような神学者のほとんどは、数学になじみのない生活を営んでいることでしょう。ましてや、背理法なんて。おそらく、背理法が本当に正しいものなのか疑っておられるのではないでしょうか。よろしい、では皆さんの身近な例で試してみしましょう。

「神は全能である」という命題について考えます。

「神は全能」なので、「神に証明できないことはない」ことは当然のことでしょう。

「神に証明できないことがない」のであれば、「神は『神が全能ではない』ことを証明できる」はずです。

おやおや、おかしいですね。これは「神が全能である」という命題に矛盾してしまいます。

よって、「神は全能である」という命題は偽であることが背理法の原理から証明されます。

以上のことから、背理法は成立しないことが分かってもらえたと思います。

皆さんご存じのとおり「神は全能」なのですから。

神の存在証明

「なあ、神って存在すると思うか？」

「なんだ、いきなり宗教家みたいなこと言い出して」

「いやさつきトイレに行っただけだよ・・・」

「ああもうオチ読めたからいいよ。どうせカミ（紙）がなかったんだろ？」

「そんなんじゃないよ。でさ、行ったら全部の階の全部のトイレが使用中で埋まってたんだよ」

「ふーん、そりやひどいな。それで？」

「もう諦めかけてただけだよ、一階の身障者用トイレが空いてたんだよ。いやー、捨てる神あれば拾う神ありって言葉は本当なんだなって。心からそう思った」

「で、その後は？」

「それで終わり」

「え？」

「そういうことがあった、ってだけの話だけど？」

「なんだよ、ここまで来て何も無いのかよ。てかトイレの話なんてするから俺も行きたくなってきたじゃねえか」

「そうか、じゃ俺先教室行ってるから」

（あれ、ついてねえな、ここ全部使用中か）

（え、ここもかよ）

（これってひよつとして・・・）

神は言っている、ここで終わるコラムではないと

文の始めに戻る↓

3次元にいる俺らは2次元を愛することはできないだろう？
だから4次元に行けば3次元を愛せるんじゃないかと思うんだ。

だから俺は4次元世界の神になる!!

神々のポイした聖杯戦争

ルイージ「俺は現人神なんだ！うおおおおー！！」

ざわ・・・ざわ・・・

マリオ「な、なんなんだこの巫力は・・・。これが、神クラスの実力なのか！？」
でっという「でっというwwでっというww」

ざわ・・・ざわ・・・

その時、黄色い閃光がつ！！

その黄色い閃光はそのままΣ字を描いた・・・

アフロの人「つい、やっちゃうんだー！！」

マリオ「なん・・・だと・・・。神クラスがもう一人・・・だと・・・。」

でっという「乙ww」

・・・という夢を見たんだ

キミに宛てたラブレター。いや、ラブレターというとちょっと大袈裟かな？でもキミへの想いをいっぱい書き記したよ。何度も何度も書き直してようやくできたんだ――

Last Love Letter

窓の外を見ると、雪が降っていた。今日はどうかホワイト・クリスマスになるみたい。まだ、外も明るいけど、早めに家を出ることにした。どうせなら街の賑わいも楽しまなきゃね。

街にはいつも以上に沢山の人達。パーティー準備で買い物を楽しむ家族連れ。大きな声で客寄せをする店員。ブランド物のバッグを彼氏にねだる女性。待ち合わせ場所で時計を何度も見直す男性。反省会と称して、愚痴をこぼしあう女子グループ。ひたすらどんちゃん騒ぎをする男子グループ。そして、何をするというわけでもなく、寄り添い歩くカップル。

本当に色んな人の色んな表情が垣間見れる。まるで一年の総決算と言わんばかり。一体どれくらいの人か、今日がキリストの生誕祭だと理解しているのかしら。まあでも、神様だって自分の誕生日には多くの人に笑ってもらいたいよね。

日も沈み、街は夜空に覆われる。その時を待っていたかのように、雪とイルミネーションが幻想的な風景を描き出す。

私は約束の場所へと向かう。そこはこの街を一望できる秘密のスポット。キミが私にくれたプレゼント。そして二人だけの宝物。今日はその宝が一番輝く日。はやる気持ちを抑えながらも、早足でその場所へと向かう。

久々に来たその場所では、予想以上に夜景を目にすることができた。日付が変わってまだ時間があつたから、私は思い切ってそこに寝転んだ。すると、星たちが綺麗に輝いて今まで、雪とイルミネーションに見惚れていた、こんなところにも美しいものはあつたんだ。手を伸ばし、ひとつひとつ星を掴もうとすると、キミとの思い出を数える。

そろそろ日付が変わる。私は身体を起こし、ケットに入れていたラブレターを取り出す。も何度も書き直したラブレター。そのラブレターを抱き寄せ、キミへの想いを確認する。どれ時間が経つたのだろう。私は長いことラブレター抱きしめていた気がする。ふと夜空を見上げ、そしてそのままラブレターを高くかざし、

――火をつけて燃やした。

ラブレターは赤い火の粉となって、夜空へ溶けいく。雪と星とイルミネーションによる幻想風景に、火の粉がさらなる彩りを加え、私の焼きついた。

「……神様、願い事、ひとつだけ。この手紙を『ミ』に届けてください。」

そんなことを呟き、笑った。神様の誕生日に笑顔でいなきゃね。でもね、やっぱり神様関係なく、キミの前ではいつも笑顔で居たい。私にはキミを見つけることはできないけど、こらキミは私のこと見つけてくれるかなって思っている。……ゴメン、せっかく見つけてくれても、見ていたら笑顔も霞んじゃうよね――

紙の神様

私は世界中の紙を司る紙の神様である。紙が生まれた紀元前百五十年前から紙たちのことを見守っておった。人々が紙をもっと使うようになるよう、紙のことで困っておる者に救いの手を差し伸べてもおる。じゃんけんに紙をモチーフにしたパーが使われるようになった時は、嬉しくてつい泣いてしまったものじゃ。今では電子機器とやらが普及しておるが、なに、こんなものに紙が負けることはないわい。今でも、紙と人は切っても切り離せない仲だからのお。お、今日も紙のことで困っている者がおるぞ。どれ、助けに行くか。

「どれ、紙のことで困り事かな？」

「おちんちん」

「……二十三日、東京都大田区大岡山駅構内の女子トイレで、利用中の個室の中に突如男性の老人が現れるという事件が起きました。老人は『わたしは神様じゃ』と弁論しており、警察は重度の認知症の疑いがあるとして警察病院に……」

神様の人形

神様はひとりぼっちだった。

あまりに寂しいからイヴという人形をつくった。
女の形なのは……まあ、彼の趣味だ。

しばらくしてからアダムという人形もつくった。
男の形なのは世間体を気にしてだ。

他には誰もいないのに。

彼の作った人形は完璧ですべてのことをこなした。
気を良くしたさらにゲノムという人形をつくった。
その人形には、前の二体になかった機能が付いていた。

『心』だ。

そしてゲノムは

イヴを

アダムを

気味悪がった。

何も感じず

何も信じず

ただただ神様と戯れる二体に

激しく——嫌悪感を覚えた。

そして、二体と同じ機能をすべて捨て、去って行った。

悔やんだ神様は何度もゲノムをつくりなおした。

しかし、そのすべてが同じように去って行った。

こうして時はたち

イヴとアダムは壊れ

我々が残っている。

死神さん

その世界には死神さんがいました。

死神さんの仕事は、増え続ける人間を減らすことです。

増えては減らし、増えては減らし、その世界と人間が減んでしまうのを防いでいました。

ある日死神さんは人間を殺しました。

その人間は足を滑らせて、高い所から落ちて死にました。

ある日死神さんは人間を殺しました。

その人間はかつとなった拍子に、血管を詰まらせて死にました。

ある日死神さんは人間をたくさん殺しました。

人間たちは不幸な事故によって、たくさん死にました。

ある日死神さんは人間を殺しました。

人間の女を、病気で殺しました。

その人間は恋人に看取られ、安らかに死んでいきました。

恋人は泣きました。泣き続けました。

恋人は死んだ女に向かって、泣きながらありがどうと言いました。

死神さんは命を羨ましく思いました。

そしてしばらく人間を殺すのをやめました。

死神さんは命に憧れました。

そしてそれが自分に与えられることはない気がつきました。

やがて死神さんは、命を妬みました。

そしてまた人間を殺すことにしました。

死神さんは人間を殺しました。

人間をたくさん殺しました。

人間をたくさん殺しました。

人間を殺すだけでは飽き足らず動物も殺しました。

魚を殺し、虫を殺し、木を、草を、微生物を、全部殺して殺し尽くしました。

そうして命のなくなった世界で、死神さんは穏やかに微笑みました。
めでたし、めでたし。

「クリスマスソング」

神は死んだ 神は死んだ

私は私の神を殺した

祈るべき神はもういない

神は死んだ 神は死んだ

私は私の力で生きる

頼るべき友も既にいる

神に縋って弱く生きるな

人を信じて強く生きろ

それは神の死 それは人の詩

聖夜に響く 人間讃歌

神は死んだ 神は死んだ

神社と願い事

たくさん嫌な出来事。挙げ句、進路について親と喧嘩した。

気づいたら家を飛び出して神社にいた。様々な不満を吐露していた。

どこかへ行ってしまいたい。

こんな世界なんて……。

願いが叶えられてしまつ。

帰り道、どこか違和感を感じる。

世界がおかしくなる。

日を経るごとに徐々にあの時願ったことが叶っていく。だけどどれも皮肉な形で。とうとう親がいなくなった。

親の言っていたことは正しかったのかもしれない。

今となっては、なんであんなにムキになっていたかわからない。

取り返しのつかないことをした、後悔の一心であの時の神社に行った。

もしも願いが叶うなら、

こんなことになる前の、普通の日々へ戻りたい。

「どこへ行ってたの……！」

声がした。

ふと見上げると母親がいた。

その後聞いた話によると、私は何日間もいなくなっていたらしい。

お年寄りの間では、神隠しではないかと噂になっていたらしい。

もしもあの時 帰りたいと願わなかったら……。

いつまでもあの世界にいたままだったかもしれない。

この世に戻る事ができなかったかもしれない。

いなくなっ
てはいけ
ない神

—
—

いつも、課題の締め切り

ぎりぎりのように、降

りてくる、

あの神。

人の身にして神格を得しものを現人神と呼ぶ。

かの者は土地神となり崇められ供物を捧げられていた。

かの者は豊穰の神として食をもつて祭事となすも

時には人柱として若い女捧げられん。

かの者戸惑い一つも考えん、この女どう為すべきかと。

かの者対処に困り女に尋ねる、我貴様をどうせしめるべきや

女は、我誇りを持って人柱に立候補せしめん、

その身をもつて役目を果たさんと欲すと答える。

かの者自身の役目とは何かを考えん、

かの者の役目とは食すこと、

食しその神性をもつて土地に豊穰の力を注ぐこと也。

かの者は決心す役目を果たすことを。

かの者自身の力の糧にせんと、食事の儀式をなし、

力をもつて繁栄せし都市にて永遠の信仰を得し。

とある異邦でのこと、語り継がれしその者は

その力への畏怖と羨望の念を以て「食神」と呼ばれし、

またの名を「食人鬼」と呼ばれながら。

神は死んだ、なんて一文で語り始めれば哲学的な雰囲気もするが、なんてことは無い、神と名乗り神と呼ばれ神と奉られ神と恐れられた人物が目の前で頭から血を流し倒れていて、そして私の手には一丁の拳銃が握られているというだけのことだった。『神殺し』にはあまりにも無粋で無骨で無風流な凶器ではあったが、むしろ神話から程遠いこの武器は相応しくも思えた。

一年程前、ふらりと現れた彼は光を纏い諦観の目をしてこう言った。「自分は神だ。世界は科学の時代をとうに迎え、多くの学問が極まりつつ行き詰りつつあった。当然なんて荒唐無稽な発言は誰も信じず、世間が彼を変人扱いするのも真つ当な流れだが、しかしその流れはいとも簡単に覆された。彼は科学では説明の出来ない不思議を使い、さらに既存の学問をぶち壊した。ある日を境に実験結果が異なるものになるの屈辱はなかった。彼が「神はサイコロを振らない」と呟くだけで長年研究された量子一瞬で全否定されるのだ。私が『神殺し』を行ったのは神が嫌いだからだ。今までの云々ではなく、単純に科学者として神を否定したかっただけなのかもしれない。

銃を頭に突きつけられても彼はいつも通りの遠い目をしてこう言った。「人間よ。我を殺すつもりか。」そんな台詞で揺らぐような決心でこゝ神の間へに來たわけではない。ああ、と答えグリップを更に強く握った。「そうか。…殺したいほど憎いか。」それも良からう、と神は囁き。嗤った。大いに嗤った。いつも無感情だった神が。壊れたように嗤い始めたのだ。不気味・恐怖・混乱、様々な感情が私の中を駆け巡った。その感情に支配される前に、と私は人差し指に力を加えた。撃鉄が落ちる直前だった。神はびたと嗤うのを止め、これまた今までに見たことのない清々しい顔で言った。「神なんて、ただの役職だよ。」「へ神の間へに銃声が響き渡った。わずかな火薬の匂いと落ちた葉莢の音が後味の悪さを感じさせた。

彼が回想からふと我に帰ると、そこに神の遺体はなく代わりに一冊の本が置いてあった。彼はその本を拾おうと手を伸ばし、そこで異変に気付く。罪に汚れたその手が輝いて見えたのだ。疑問を抱えたまま本を拾い、表紙をめくった。《これより貴方が神です》。ページをめくる。《不老の身にて人を導きなさい》。手が震える。…《学問などの進歩が行き詰ってきた場合、向上心を保つ為、理を変えることも止む無し》。…罪に輝くその手の震えが止まらない。…《神の命を奪えるのは人のみ》。…彼は読み終えると膝から崩れ落ち、頭をうなだれた。その姿は見えない罪に跪いているようにも、肩にのしかかる罰の重さに耐えかねているようにも見えた。その後の彼の行方を知る者はいない。

神が死んでから三千年程が経ち、再び神は現れた。その眼は諦観に満ちていたという。